

第3章 調査の成果

第1節 調査区割り

1号墳の中軸線(南北ライン)を設定し、3級基準点・4級基準点、1号墳及び周囲に便宜的にグリッド杭を設定した。東西軸は東方向に1・2・3・4とアラビア数字を付け、南北軸は南方向にA・B・C・D・Eと付けた。出土遺物については、基本的に墳丘測量図にドットを落とし、取り上げた。標高は東京湾平均海面(T. P.)を基準とした。2号墳については、1号墳の中軸線と同じ方位を援用して中軸線を設定し、トレンチ調査を実施。古墳および周辺の地形をマップデジタル化及び墳丘測量を実施した。

第2節 1号墳(前方後円墳)

1号墳は、丘陵の北西端に位置し、西側と北側は急斜面な谷地形となっている。前方後円墳の調査を最初に実施。樹木を伐採し、見通しは良くなったが、墳形を正確に把握するための伐採、下草刈り等に多くの労力がかかった。1号墳の後円部主体部は大きく盗掘を受けていることは、以前から確認できており、また後円部南西部など削平された状況もうかがえた。後円部の墳丘は高く、前方部の墳丘が低平な矢田高木森古墳と似た墳形を呈しており、前方部東には墓石があり、墳丘の一部が改変されていた。

墳丘表面の掃除を実施したところ、遺物の散布が見られた。特に後円部の墳頂部を中心に北・東・西の墳丘斜面に板石が散在し、埋葬施設との関連がうかがえたが、寸法も小さく、出土量も多くはない。土師器以外に、弥生土器・縄文土器も僅かに散見され、古墳以前の暮らしも推測できた。

1号墳の墳丘上での遺物の出土状況は、被葬者を埋葬した際の葬送儀礼の痕跡を復元できる可能性も考えられたため、出土ポイントにピンホールを挿して、ナンバリングをして遺物を取り上げた。必ずしも、1点ずつナンバリングをしているのではなく、場合によっては周辺に散布する(半径約50cm以内)遺物をまとめて取り上げた。(平成25～26年度に実施。平成27年度については、草刈りや清掃、自然条件で原位置から大きく移動していると推測される場合には、番号は付けていない。)

1号墳・2号墳を通して1から70番までの出土ポイントがあった。(第2図参照)ほとんどが1号墳での出土である。

1) 出土遺物の分布

墳頂部は盗掘により、東部分は削平を受けており、西側の方が墳丘は高い。現況から判断すれば、東側寄りに埋葬施設が存在した可能性が考えられた。墳頂中心部分に大杉があり、伐採後に根元周辺の攪乱を清掃して、西側の墳丘土層の確認を試みたものの、表面観察のみに留まった。かなり軟質の土層であったため、盗掘の際の廃土の可能性も考えられた。

後円部からは、安山岩質の板石が多く出土している。これは、三室まどがけ古墳群や矢田高木森古墳の石室の床石に使用されたものと同じの石材と推測され、能登島須曾蝦夷穴古墳近くの海岸部で採取され、同古墳にも使用された石材と思われる。ただし、大きいものでも20cm程度で小片の板石がほとんどである。墳丘の東側から南側にかけて15点ほどの板石が墳頂から墳裾にかけて出土している。また、後円部墳頂の北から前方部及び東西くびれ部付近で20点程の板石が出土しており、その分布状況から後円部に使用されていたことが類推され、盗掘の際に散在したような出土状況と想定できそうである。土師器片は多く出土しているが、ほとんどが細片で甕が多い。他に壺・鉢が